様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０３１７
研究課題名（和文）　韋君宜から見た中国革命史再構築の試み――作家、編集者、革命家の視点から
研究課題名（英文）　Reconstructing a History of the Chinese Revolution from the Perspective of Wei Jun-yi, a Writer, Editor, and Revolutionist

研究代表者
楠原　俊代（KUSUHARA TOSHIYO）
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：３０１３１２８８

研究成果の概要（和文）：韋君宜の全著作と関係資料を収集し、読解・分析することによって、作家、編集者、革命家であった韋君宜の視点から、中国革命史の再構築を試み、学会発表を 2 回おこない、韋君宜年譜と 2 編の論文を発表した。本研究によって、中国においては現在も歴史の改竄・削除がおこなわれ、「真話(本当の話)を語ること」がきわめて困難であることと、それに抗して「当代人の責任」として、「多くの真実の資料」を残そうとしている知識人がいることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project attempted to reexamine and reconstruct the history of the Chinese Revolution.　I excavated the complete works of Wei Jun-yi and related materials, and through analyzing them I revealed that it is still extremely difficult to tell the “true story” in China where “altering” and “eliminating” a part of its history is not uncommon.　I also demonstrated that despite such a tendency, there exist some Chinese intellectuals who feel responsible for preserving “real” historical materials as contemporaries living in this age and are making efforts to do so for future generations.　As a product of this project, I presented papers at two academic conferences as well as published two articles and a biographical note on Wei Jun-yi.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：中国文学

１．研究開始当初の背景

本研究課題を申請した 2006 年は、文革発動 40 周年、文革終結 30 周年の節目の年であったが、中国国内では、いかなる記念活動をおこなうことも禁止された。この 30 年来、文革は議論することも回想することも許されない歴史の禁忌となった、と言われている。しかもこの禁忌は、中国革命史全体にまで及んでいる。

本研究においてとりあげる韋君宜（1917－2002）は、日本ではほとんど知られていないが、中国では人民文学出版社社長でもあった著名な作家である。作家として多くの作品を発表しはじめたのは、60 歳をこえてからのことであり、したがって韋君宜は作家であるというよりも、1936 年 5 月抗日のためにわずか 18 歳で中国共産党に入党して以来、何よりもまず中共党員として生き、その生涯を中国革命に捧げたといえる。その韋君宜が著した延安以来の回想録『思痛録』は、ひとりの女性革命家の目を通して記された、約 50 年にもおよぶ中共党史、中国革命史なのでもある。『思痛録』は 1998 年に北京版が、2000 年には香港版が出版されている（北京十月文芸出版社、香港天地出版公司）。この香港版によって、北京版では毛沢東個人に対する批判とそこから出てくる中共批判、政策・運動の中身についての詳細な記述の部分が削除されていたことが明らかになった。すなわち、この点については中国本国において、いまだあからさまには論じられることのないものである。

２．研究の目的

韋君宜は、文革初期には自殺も考え、二度と文芸界に復帰しないと考えていたが、文革後半期にはなんとしても生き延びて、この事実を本に書こうと考えるにいたった。韋君宜は、いったい何があったのかを知り、それらのことについて考えてみようとすることは、この国家の主人が今後生存していく上で必要なことであり、歴史は忘却されてはならないものだとして、彼女にとっての中国革命の「真実」を、60 歳をすぎてから 200 万字近くの小説、散文を、病気や怪我と戦いながら執筆した。その記述と、中共中央文献研究室の記す歴史との齟齬は多岐にわたる。

本研究は、韋君宜の全著作の分析を通して、韋君宜が確かに見て、経験した事実をもとに、彼女が 1939 年延安に赴いて以来の、搶救運動から 1983 年の周揚批判にいたるまでの、韋君宜にとって「真実」の中国革命史を再構築しようと試みるものである。韋君宜の全著作は収集済みであるが、本研究においては、韋君宜の遺族や関係者から取材をするとともに、国内外の韋君宜と中国革命史に関する資料をさらに収集し、これらの資料を丹念につきあわせることによって、中国革命の再検証をおこなう。

３．研究の方法

(1)2007 年９月６日から１０日まで中国に出張し、韋君宜の遺族・関係者から取材をするとともに、関係史料の収集をおこなった。

(2)国内外の韋君宜と中国革命史に関する資料を収集するとともに、韋君宜の全著作と関係資料を読解・分析し、個人（韋君宜）が歴史にいかに関与しうるのか、個人（韋君宜）の証言は歴史の中でいかなる意味を持ちうるのか、また文学（韋君宜の全著作）が歴史に対していかなる役割を果たしうるかについて考察しながら、韋君宜にとって「真実」の中国革命史の再構築を試みた。本研究計画を遂行する際には、韋君宜の記す「歴史」を次の三つの時期に分けて作業を進めた。2007 年度・中華人民共和国成立まで（1935～49 年）、2008 年度・中華人民共和国成立から文革期まで（1949～78 年）、2009 年度・改革開放期（1978～95 年）。

(3)京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センターの共同研究班「20 世紀中国の社会システム」（森時彦班長）、「中国社会主義文化の研究」（石川禎浩班長）に参加し、本研究成果の報告をおこなうとともに、論文を執筆し、研究報告論文集に発表した。

４．研究成果

(1)詳細な「韋君宜年譜」を執筆し、『吉田富夫先生退休記念中国学論集』に発表した。「韋君宜年譜」の作成は作家、編集者、革命家であった韋君宜から見た中国革命史を再構築してゆくうえで、不可欠な作業であったが、この年譜は、韋君宜の遺族の管理するホームページ「韋君宜在線紀念館」の年譜よりも詳細かつ正確なものである。

(2)本研究によって、中国においては現在も歴史の改竄・削除がおこなわれ、「真話（本当の話）を語ること」がきわめて困難であることと、それに抗して「当代人の責任」として、「多くの真実の資料」を残そうとしている知識人がいることを明らかにした。その具体例は次のとおりである。

①中国では著名な作家、韋君宜の代表作である長編回想録『思痛録』は、発売されるやたいへんな売れ行きで、「韋君宜現象」が起きたとも言われるほどの反響を呼び、「1998 年十大好書」文学類の第 1 位に選ばれたにもかかわらず、国家と武漢大学のプロジェクトとして編纂、出版された陳文新主編『中国文学編年史・当代巻』(湖南人民出版社、2006 年)に、本書が収録されていない。中国文学史の中で『思痛録』は無かったものにしようとされているのではないか。

②『思痛録』には、香港版・北京版・最新修訂版の３種があるが、最新修訂版前書きの改竄・削除が最も甚だしく、韋君宜の当初の意図からいっそう懸け離れたものとなっている。

③『思痛録』には、六四天安門事件について書かれた未発表の手稿があるが、それは香港版でも、そしていまだに削除されたままである。

④韋君宜は 1980 年以降、60 歳をとうに過ぎてから、人民文学出版社総編集、社長としての激務をこなしたうえで、その勤務時間外に、また闘病生活を送りながら、12 冊もの著書を出版して残した。実質的に、文革終結後に出版された最初の作品集『似水流年』「後記」で、韋君宜は本書を暫時「自伝小説」のかわり、あるいは「歴史」のかわりとする、これは粉飾する余地のない「歴史」であると述べている。しかしその後の著書「前言」「後記」の中で、韋君宜はもはや自分の書いたものが「歴史」であるとは言わず、小説、散文を問わず、自分が書きたいこと、書かなければならないと思ったことを、正直に、自分が見て知っていることに基づいて書く、真話を語る、と述べているにもかかわらず、韋君宜の書いたものは「歴史」でもあると高く評価され、「韋君宜現象」が沸き起こり、多くの知識人が「歴史」について語りだした。特に中華人民共和国成立から文革期にいたるまでは、ほとんどやむことのない大規模な思想改造と際限のない運動が繰り返されてきたのであり、この時期を含む回想録などの出版に際しては、今日においてもなお削除、改竄がおこなわれ、時には発禁とされる場合もある。「中国においては、真話を語ることは極めて困難である」とはいえ、それに抗して「当代人の責任」として、「多くの真実の資料」を残そうとする知識人が、これまで語られることのなかった中国革命の「真実」を、目立たないかたちで様様な所で述べていることがわかってきた。

⑤韋君宜主編の『文芸学習』の発行部数は、最盛期には『人民文学』の 2 倍近く、『文芸報』のほぼ 2 倍か、それ以上あり、「双百」〔百花斉放・百家争鳴〕方針のもとで大きな影響力をもっていたが、『中国大百科全書・中国文学』に、『文芸報』の項目はあっても、『文芸学習』の記載は無い。本誌もまた中国文学史の中で無かったものにされようとしているのか。

(3)以上の研究成果は次の２編の論文にまとめて発表した。

①「韋君宜と『文芸学習』について」、石川禎浩編『中国社会主義文化の研究』(京都大学人文科学研究所、2010 年 5 月) 所収 (予定)

②「韋君宜の著作における『歴史』の意味について」、森時彦編『20 世紀中国の社会システム』(京都大学人文科学研究所、2009 年 6 月 30 日) 所収、459-493 頁

また、本研究課題の成果を総括して、2010 年 7 月 10 日 (土)、京都大学中国文学会第 25 回例会(於京都大学百周年時計台記念館)において報告(招待講演)をおこなう予定である。

(4) 本研究によって中国革命史の再構築を試み、中国においては現在も歴史の改竄・削除がおこなわれていることを明らかにした。韋君宜『思痛録』の削除部分がいまだ中国大陸で刊行を許されないことからも知られるように、本研究テーマ自体が、中国大陸ではあからさまに論じられないものである。かねてより研究上の意見交換をおこなってきた中国社会科学院近代史研究所の聞黎明氏からも、申請者の研究テーマは、「扱った人はほとんど無いようだ、少なくとも自分は見たことがない」と言われており、これまで国内外の関連研究のなかで、一貫してこのように位置づけられるもので、ここに本研究のインパクトがある。また本研究成果を基礎として、それでは韋君宜に啓発され、歴史を反思〔反省・振り返って考えなおす〕する責任感と使命感を呼び覚まされた多くの知識人は、歴史といかに向き合い、どのような「真実の資料」を残そうとしたのかという、新たな研究テーマ「当代散文の研究――記憶の中の中国革命史再構築の試み」への展開が可能となった。中共現政権にとって「敏感」な問題である歴史認識と中国革命史再構築については、日本でこそ中共の文芸政策・宣伝工作に影響されることなく、大量の文献資料に依拠して実証的な研究を推進できるものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

① 楠原俊代、韋君宜と『文芸学習』について、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター「中国社会主義文化の研究」共同研究班、2008 年 12 月 5 日、京都大学人文科学研究所新館

② 楠原俊代、韋君宜から見た中国革命史再構築の試み――作家、編集者、革命家の視点から、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター共同研究班「20 世紀中国の社会システム」、2007 年 11 月 30 日、京都大学人文科学研究所分館（北白川）

〔図書〕（計３件）

① 石川禎浩、江田憲治、楠原俊代、他、京都大学人文科学研究所、中国社会主義文化の研究、2010、pp. 115-151

② 森時彦、石川禎浩、楠原俊代、他、京都大学人文科学研究所、20 世紀中国の社会システム、2009、pp. 459-493

③ 吉田富夫、楠原俊代、他、汲古書院、吉田富夫先生退休記念中国学論集、2008、pp. 399-410

〔その他〕
ホームページ等
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/459-493.pdf
http://www.geocities.jp/nanyanjd/prof

６．研究組織
(1)研究代表者
楠原　俊代（KUSUHARA　TOSHIYO）
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：３０１３１２８８

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し